

とぶとりにヒトチョウ
 分野融合基礎A 「『飛鳥』をなぜ『あすか』と読むのか。科学的に思考してみよう」 教員指導案

- (1) 目標：岡高キー・コンピテンシーである「知識を統合する力」「課題発見力」「文章表現力」を伸ばす。
- (2) 方法：文系(地理・古文・日本史)の分野融合的な研究事例を題材に，科学的に思考する力を養う。
- (3) 教材：① 教員指導案 (A4 両面 1 枚)
② ワークシート 1～3 (A4 片面 2 枚・A4 両面 1 枚)
- (4) 持ち物：筆記用具，AKC ファイル，タブレット PC
- (5) 事前準備：① 情報量が多い指導案の理解・把握。(本時を実施する際の核心部は，裏面の資料を参照)
② 班分け(4人1組) → 各クラス担任で編成。授業開始前に，班ごとに机を合わせておく。
- (6) 担当者(各教室で実施)： 5日 1組:〇〇， 2組:△△， 3組:□□， 4組:◇◇， 補助:▽▽
12日 5組:▽▽， 6組:〇〇， 7組:△△， 補助:□□・◇◇
19日 8組:□□， 9組:▽▽， 10組:◇◇， 補助:△△・〇〇
- (7) 本時の指導計画 (反転部：本時の展開過程が分かる，「足利健亮」を検索させないための措置)

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 2分	本時の目標	・本時の目標(上記(1))を確認する。	・本時の目標は，上記(2)を題材に，上記(1)を修得することだと説明する。
展開1 (3分)	ワークシート1 Activity1	・【1学期AKCの振り返り】の要点を確認する。 ・【今回のAKC】の Ac.1 に自分の考えを記入する。	・「ワークシート1」を配付。 「ワークシート2」配付厳禁 ・【1学期AKCの振り返り】を確認させる。 ・【今回のAKC】を読み上げ， Ac.1 に各自で静かに取り組ませる。
(3分)	Activity2	・班員と意見交換しながら， Ac.2 を記入する。	・ Ac.2 に班で取り組ませる。 (なお， Ac.2 までは，研究ではなく調べ学習)
(6分)	Activity3	・教員とのインタラクション(Ac.3) ・多くの班が，「『飛ぶ鳥』は『あすか』の枕詞」との理由を得た後に，反証される「経験」をする。	・一部の班代表に発表させ， Ac.3 に取り組む。 ・「『飛ぶ鳥』は『あすか』の枕詞」との理由を得させた後に，「それでは『あすか』の枕詞が『飛鳥』となる『理由』にはならない」と，指摘(反証)する。
計 12分			
展開2 (2分)	ワークシート2 【資料1】	・【資料1】を読む。	・「ワークシート2」を配付。 ・【資料1】を各自で静かに読ませる。
(3分)	【資料2】	・【資料2】を通して，足利健亮の考え方を理解し，通説を反証した点を理解する。	・【資料2】を説明する。 ・仮説～追検証の過程と，その考え方を理解させ，通説が反証された点を理解させる。
(6分)	Activity4	・ Ac.4 に自分の考えを記入する。 以降タブレット使用不可	・ Ac.4 を読み上げ，各自で静かに取り組ませる。 (なお， Ac.4 からが，調べ学習ではなく研究)
(5分)	Activity5	・班員と意見交換しながら， Ac.5 を記入する。	・ Ac.5 に班で取り組ませる。 (時間があれば各班代表に発表させる)
計 16分			
展開3 (3分)	ワークシート3 【資料3】	・【資料3】を読む。	・「ワークシート3」を配付。 ・【資料3】を各自で静かに読ませる。
(6分)	【資料4】	・【資料4】を通して，足利健亮の科学的思考を確認する。	・【資料4】を説明し，仮説～検証を理解させる。 (時間があれば【参考資料】をタブレットで紹介する)
(5分)	Activity6	・班員と意見交換しながら， Ac.6 を記入する。	・ Ac.6 を読み上げ，各自で静かに論述させる。 (時間がなければ， Ac.6・Ac.7 は省略可)
(4分)	Activity7	・教員とのインタラクション(Ac.7) ・班の代表が発表する。	・班の代表に発表させ，地名と読みを板書する。 (時間がなければ， Ac.7 は省略可)
計 18分			
まとめ 2分	本時のまとめ	・文系の研究や，分野融合の研究について確認する。 ・AKC ファイルにワークシート1・2を綴じ，3を提出。	・「研究は文系も科学的であり，研究分野の融合により解決できる事象がある」ことを理解させる。 ・本時の内容は，他クラス，新1年生に他言無用と周知 ・ワークシート3のみ回収し，担任裁量で点検。

かの辞書を見ました。ある地名辞典は、「あすか」の枕詞に「飛ぶ鳥」の句が用いられたため「飛鳥」と表記する、と説明しています。ある百科事典も、「飛ぶ鳥のあすか」とよむ枕詞の「飛ぶ鳥」から出たもの、と同類の説明をしていました。また、ある国語辞典は、「飛鳥」の字は「明日香」の枕詞「とぶとり」を当てたもの、と説いていました。

以上三つの辞書を見たところで、私はそれ以外の辞書の追跡を断念しました。おそらく他の説明も同様だろうと判断したからです。そして、そういう説明にとどまるとすれば、辞書類の読者は誰も十分納得できないのではないかと思つたのです。

「飛鳥（とぶとり）」は、確かに「あすか」の枕詞です。しかし、なぜ「飛鳥（とぶとり）」が「あすか」の枕詞になったのかを説明することから始めなければ、正確な理解には到達できないのではないかと思うのです。枕詞という言葉で片付けてしまうことは、正解に至る道を閉ざしてしまうという点で危険です。ある言葉がもう一つの言葉の枕詞になるためには、当然それなりの理由があるはずで、残念ながら先に見た辞書には、どこにもその理由が記されておらず、「あすか」の用字に枕詞がすりかわって入りこんだ理由についても一切述べられていません。これでは何も分からないのです。

第14章 新しい地名解釈から見えるもの

飛鳥は、なぜ「あすか」と読むのか

地名は、地図と並ぶ歴史地理学の基本資料です。これまで地図の上でいくつかの「景観から読める歴史」の事例を語り、その意味を解く試みをしてきた間にも、しばしば地名解釈が「ものを言う」ことがありました。この章ではその地名を主役の座に引き出し、一つの切り口からの地名解釈、ないし地名論を述べてみたいと思います。地名解釈といっても、地名の語源については原則として触れるつもりはありません。一般に地名、特に古地名の語源を解くことはかなり難しく、下手をすると荒唐無稽で無意味な地名解釈に陥ってしまうからです。

ここで私が試みる地名解釈とは、普通ではその漢字は絶対そうは読めないという種類の漢字地名の問題、例えば飛鳥という地名はなぜ「あすか」と読むのか、百済はどうして「くだら」と読めるのか、といった「不思議さ」に答えを示すことです。

さて、飛鳥はなぜ「あすか」と読むのでしょうか。これについて私は、まずいくつ

「あすか」のもともとの意味は、不明と言うべきです。が、ともかく「あすか」と呼ぶ土地・地域があつたはずで、そこへ漢字文化が流入し、「あすか」に漢字が当てられることになった。その時当てられた漢字は「安宿」であつたに違いないと思えます。「安宿」の用例は河内国のいわゆる「近つ飛鳥」地域の郡名にありました。これならば間違いなく「あすか」の音に合致します。さらに光明皇后が安宿媛（あすかひめ）という名であつた事実があります。これは奈良時代の初めに「あすか」を「安宿」と表記していた証拠になります。

そして重要なことは、はじめ「安宿」の字が用いられたからこそ枕詞が「飛ぶ鳥の」となり得たということです。「安宿」は「やすやど」などではありません。「やすらかなやど」と解するのが、雅（みやび）というものです。そして、「やすらかなやど」であるならば、飛ぶ鳥も好んで羽を休めたに違いない。そういう文脈の中で、「飛鳥」が枕詞となり、「飛鳥（とぶとり）」の安宿（あすか）という表現が成立・普及することになったと解すべきなのです。

次いで、古代日本人が好んで行なつたらしい「短縮」の手法が加えられました。それは「とぶとり」という「音」を略し、「安宿」という文字を略して、「あすか」の「音」を「飛鳥」の文字に結合するという手法にほかなりません。これと同様な「短縮」の手法は、「下毛野（しもつけぬ）」の「毛」の字と「ぬ」の音を略して「下野（つもつけ）」とした例、「近淡海（ちかつおうみ）」の「ちかつ」の音を略し、「淡」の字を落とし（且つ「海」を「江」字に変えて）「近江（おうみ）」と作つた例など、いくつも見られるのです。

『万葉集』では「明日香」の字が使われていますが、これは『万葉集』の風雅であつて、「明日香」の用字が漢字到来の最初に当てられていたならば「飛ぶ鳥」が枕詞として成立するはずはなかつたでしょう。これは大事なことです。

ところで、余談ながら、「あすか」の由来は何かについて私見を述べます。「地名辞書」類によれば、(1) 鳥が多く群棲したことによる、(2) ア（接頭語）スカ（住処）で集落を意味する、(3) アス（崩地）カ（処）の意、(4) ア（接頭語）スカ（洲処）の意、(5) 朝鮮系渡来者の安住の地（安宿）のこと、などの諸説がある由ですが、残念ながらいづれも説得力があるとは思えません。(1) と (5) は漢字に引きずられているもので論外です。私はむしろ仏教の保護者であつたアシヨカ王（阿育王）か、さもなければ阿闍（あせつ）という如来の名に因む地名として成立したのが「あすか」ではあるまいかと思うのですが、地名の発生源は解くのが難しいという立場をとつていきますので、この解釈にこだわらなうつもりはありません。

【資料1】 地理学者^{あしかがけんりょう}：足利健亮の『NHK 人間大学』テキスト「景観から歴史を読む 地図を解く楽しみ」より
【足利健亮】 (1936～99) 京都大学大学院人間・環境学研究科長，総合人間学部教授。日本史における大胆な仮説を掲げ，地理学から論証する達人だった。発表した論説が，後発の研究・発掘により事実と確認されるなど，多大な業績を遺した。

さて、「飛鳥」はなぜ「あすか」と読むのでしょうか。これについて私は、まずいくつかの辞書を見ました。ある地名辞典は、「あすか」の枕詞に「飛ぶ鳥」の句が用いられたため「飛鳥」と表記する、と説明しています。ある百科事典も、「飛ぶ鳥のあすか」とよぶ枕詞の「飛ぶ鳥」から出たもの、と同類の説明をしていました。また、ある国語辞典は、「飛鳥」の字は「明日香」の枕詞「とぶとり」を当てたもの、と説いていました。

(中略) そういう説明にとどまるとすれば、辞書類の読者は誰も十分納得できないのではないかと思ったのです。

「飛鳥(とぶとり)」は、確かに「あすか」の枕詞です。しかし、なぜ「飛鳥(とぶとり)」が「あすか」の枕詞になったのかを説明することから始めなければ、正確な理解には到達できないのではないかと思うのです。枕詞という一言で片付けてしまうことは、正解に至る道を閉ざしてしまうという点で危険です。ある言葉がもう一つの言葉の枕詞になるためには、当然それなりの理由があるはずで。残念ながら先に見た辞書には、どこにもその理由が記されておらず、「あすか」の用字に枕詞がすりかわって入りこんだ理由についても一切述べられていません。これでは何も分からないのです。

【資料2】 <足利健亮の考察と補足>

仮説(通説) : 「飛鳥(とぶとり)」を「あすか」と読む理由は、「飛鳥(とぶとり)」が地名「あすか」の枕詞だから。 **非演繹**

検証(調査) : 「飛鳥(とぶとり)」を「あすか」と読む理由を、辞典類で調査した。 **演繹**



→ **成功(確認)** : 「飛鳥(とぶとり)」は、確かに「あすか」の枕詞である。

→ **失敗(疑問)** : なぜ、「あすか」の枕詞が、「飛鳥(とぶとり)」なのか。

追検証 : 「あすか」の枕詞が「飛鳥(とぶとり)」となった理由について、辞書類で調査した。 **演繹**

→ **失敗(反証)** : 「あすか」の枕詞が「飛鳥(とぶとり)」となった理由は不明である。

※ 「仮説(通説)」は、「検証(調査)」により、一部「反証(否定)」された。

補足①【枕詞】 被修飾語を、それに関する語意で修飾する語句。歌中では意味をもたないので、訳出しない。

例：枕詞「あおによし」→ 被修飾語「なら(奈良)」… (建物の)碧(窓枠の緑色)，丹(柱の朱色)，美し，平城(京)

補足②【文献や地名に遺る「あすか」の表記例】 明日香・阿須賀・阿須箇・阿須可・阿須迦・安須可・安宿

「あすか」の表記が多種あることから、漢字表記より先に「あすか」の発音が存在していたと考え得る。

Activity4 : 上記補足②の表記のうち、「あすか」を修飾する枕詞が「飛鳥(とぶとり)」となり得る表記が1つあります。どれでしょうか。「**自分自身**」で考えてみましょう。また、そうなり得る理由を考えてみましょう。
 (以降タブレット使用不可) (他の枕詞の由来などを、紙の辞書等で調べるのは可)

- ・「飛ぶ鳥の」が掛かり得る地名表記【 】
- ・ その理由

Activity5 : **Activity4**について、「各グループ」で話し合みましょう。(時間があれば、クラスで共有しましょう)

- ・「飛ぶ鳥の」が掛かり得る地名表記【 】(【 】())
- ・ その理由

【資料3】 足利健亮の『NHK 人間大学』テキスト「景観から歴史を読む 地図を解く楽しみ」より

「あすか」のもともとの意味は、不明と言うべきです。が、ともかく「あすか」と呼ぶ土地・地域があったはず。そこへ漢字文化が流入し、「あすか」に漢字が当てられることになった。その時に当てられた漢字は「安宿」であつたに違いないと思います。「安宿」の用例は河内国^{かわちのくに}のいわゆる「近つ飛鳥^{ちかあすか}」地域の郡名にありました。これならば間違いなく「あすか」の音に合致します。さらに光明皇后^{こうみょう}(※2)が安宿媛^{あすかへひめ}という名であつた事実があります。これは奈良時代の初めに「あすか」を「安宿」と表記していた証拠になります。

そして重要なことは、はじめ「安宿」の字が用いられたからこそ枕詞が「飛ぶ鳥の」となり得たということです。「安宿」は「やすやど(※3)」などではありません。「やすらかなやど」と解するのが雅^{みやび}というものです。そして、「やすらかなやど」であるならば、飛ぶ鳥も好んで羽を休めたに違いない。そういう文脈の中で、「飛鳥」が枕詞となり、「飛鳥(とぶとり)の安宿(あすか)」という表現が成立・普及することになったと解すべきなのです。

次いで、古代日本人が好んで行つたらしい「短縮」の手法が加えられました。それは「とぶとり」という発音を略し、「安宿」という文字を略して、「あすか」の発音を「飛鳥」の文字に結合するという手法にほかなりません。これと同様な「短縮」の手法は「下毛野^{しもつけぬ}」の「毛」の文字と「ぬ」の発音を略して「下野^{しもつけ}」とした例、「近淡海^{ちかつおうみ}」の「ちかつ」を略し、「淡」の字を落とし(且つ「海」を「江」字に変えて)「近江^{おうみ}」と作った例など、いくつも見られるのです。

『万葉集』では「明日香」の字が使われていますが、これは『万葉集』の風雅であつて、「明日香」の用字が漢字到来の最初にあてられていたならば「飛ぶ鳥」が枕詞として成立するはずはなかつた。これは大事なことです。

※1 【近つ飛鳥】大阪府羽曳野市東部や南河内郡太子町などを指す古代の地名。大和国の飛鳥と区別するため、難波宮(大阪市)から見て近い河内国の飛鳥を「近つ飛鳥」「河内飛鳥」、遠い大和国の飛鳥を「遠つ飛鳥」「大和飛鳥」と称した。

※2 【光明皇后】(701~760) 聖武天皇^{きみかみ}の后。藤原鎌足^{かみあし}の息子である藤原不比等^{ふひと}の娘。仏教の信仰が厚く、孤児・病人の救護施設を創設した。

※3 【やすやど】宿泊代の安い施設。転じて、サービスなどの質が低い宿泊施設を指すこともある。(今日では使用上、注意を要する語)

【資料4】 <足利健亮の考察と補足>

仮説 : 地名「あすか」を、漢字で初めに「安宿」と書いたから、「飛ぶ鳥の安宿」という枕詞が生まれた。 非演繹

検証(調査) : 表記「安宿」の用例を、文献や現地などで調査した。 演繹

→ **成功(確認)** : 「河内国安宿郡」や「安宿媛」などの用例が、奈良時代初頭に存在した(※1)。
 ※1 地名「近つ飛鳥」が、明治以前に 遡り得ることは、「今昔マップ on the web」【裏面】でも証明できる。

情報分析(考察) : 「安宿」と表記される地名だったから、その枕詞が「飛ぶ鳥の」となった。 演繹

→ **成功(論証)** : 「安宿」の枕詞として、「飛ぶ鳥が羽を休める『安らかな宿』」は、成立し得る。

※ 「仮説」は、「検証(調査)」と「情報分析(考察)」により、立証された。

仮説 : 「飛ぶ鳥の安宿」は、「短縮」手法により、「飛鳥=あすか」となった。 非演繹

検証(調査) : 「短縮」手法の事例を、文献などで調査した。 演繹

→ **成功(確認)** : 「下毛野^{しもつけぬ}」を「下野^{しもつけ}」、「近淡海^{ちかつおうみ}」を「近江^{おうみ}」など(※2)の用例がある。
 ※2 他には、地名「初瀬^{はつせ}」の枕詞「長谷^{ながたに}」から「上野^{こうぜ}」や、「遠淡海^{ととおみ}」を「遠江^{ととうみ}」など。
 なお、足利健亮は【資料3】以外で、「諸国郡郷名著好字令^{しよこくぐんごうめいじよこうじれい}」(※3)の影響もあると指摘している。
 ※3 通称「好字二字令^{こうじにじりょう}」。「倭^{やまと}」から「大和^{やまと}」をはじめ、中国から見て野蛮ではない漢字2字の地名表記に統一した。
 例: 「下毛野^{しもつけぬ}」を「下毛^{しもつけ}」よりは「下野^{しもつけ}」、「木^{きの}」国を「紀伊^{きのくに}」国、「津^{つの}」国を「撰津^{つづくに}」国、「火^ひ」国を「肥前^{ひぜん}」国と「肥後^{ひご}」国。

情報分析(考察) : 『万葉集』の表記「明日香」が「安宿」より先に存在したら、「飛ぶ鳥」が枕詞として成立しない。
 → **成功(論証)** : 表記が「明日香」では「飛ぶ鳥」が枕詞とならず、2文字でもない。 演繹

※ 「仮説」は、「検証(調査)」と「情報分析(考察)」により、立証された。

Activity6 : 地名「あすか」の表記が「安宿」だったから枕詞「飛ぶ鳥の安宿」が成立し、「短縮」手法の流行があったから「飛鳥」が成立しました。両者とも、**論理的**でかつ**世間の合意**が得られたからこそ成立し、千年以上も受け継がれてきたのです。そこで、千年のちまで受け継がれ得るような新たな枕詞と地名を、**「各グループ」**で意見交換しながら創作してみましょう。また、創作する際には、その字と音の結合が**論理的**であり**グループ全員の合意が得られる**ことを意識しましょう。

なお、題材は「三河」の地名・駅名等とし、「短縮」手法は「枕詞の字」と「地名の音」の結合とします。

- (例) 新枕詞【 飛ぶ鳥の 】 + 地名【 安宿 】 = 新地名【 飛鳥 】… 理由【 安宿は、飛ぶ鳥も羽を休める安らかな宿のようだから 】
- ・新枕詞【 】 + 地名【 】 = 新地名【 】… 理由【 】
 - ・新枕詞【 】 + 地名【 】 = 新地名【 】… 理由【 】
 - ・新枕詞【 】 + 地名【 】 = 新地名【 】… 理由【 】
 - ・新枕詞【 】 + 地名【 】 = 新地名【 】… 理由【 】

Activity7 : 各グループの代表が、**Activity6**で創作した新地名と枕詞を発表し、クラスで共有しましょう。発表を聞く際は、新地名の由来が**論理的**で**合意が得られ**、成立し得るか否かを意識しましょう。

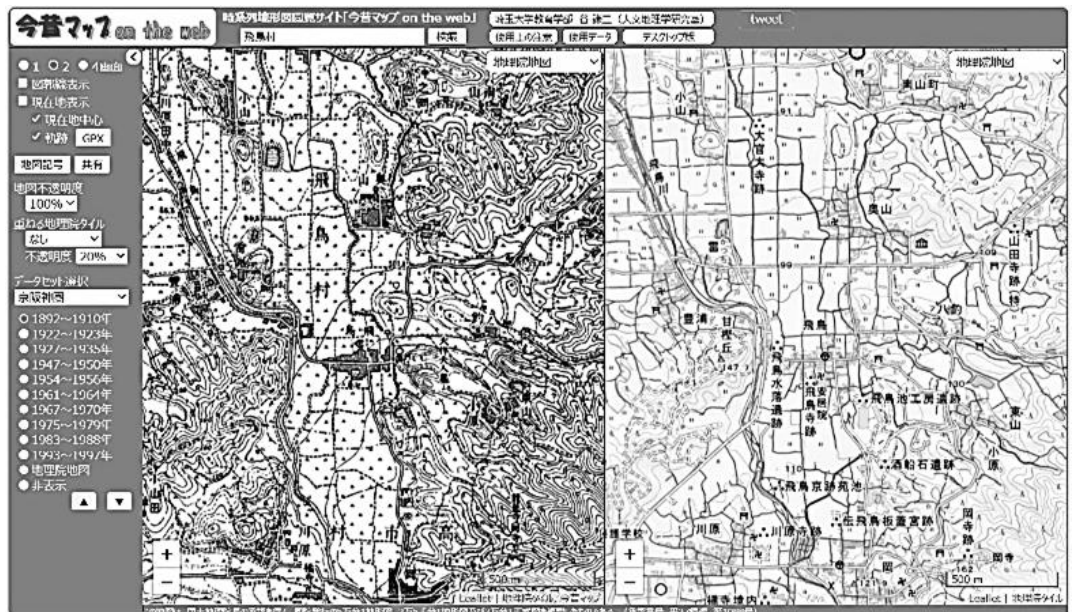
【参考資料】「今昔マップ on the web」

谷 謙二 『今昔マップ旧版地形図タイル画像配信・閲覧サービス』の開発」GIS-理論と応用 25(1), 2017, 1-10 頁

旧版の地形図(国土地理院発行)を無料で閲覧できるサービス。特定地域の複数年代の地形図を、新旧対照できる。

利用方法

- ①「今昔マップ」で検索。
- ②閲覧したい地域をクリックすると、右の様式の画面に。
- ③左半分の旧図を拡大・縮小やスクロールすると、右半分の新図も連動する。
- ④左下の年代を選択すると、旧図が切り替わる(※)。



※ 選択した年代の旧図が未掲載の場合、左半分にも右半分と同じ新図が表示される。

【出典】 (原典) 足利健亮『NHK 人間大学 景観から歴史を読む 地図を解く楽しみ』日本放送出版協会, 1997, 140-143 頁
 (増補) 足利健亮『景観から歴史を読む 地図を解く楽しみ』NHK ライブラリー(日本放送出版協会), 1998, 249-253 頁
 (改題) 足利健亮『地図から読む歴史』講談社学術文庫(講談社), 2012, 234-237 頁